

第20回 江戸幕府の解体

さて、2010年のNHK大河ドラマは坂本龍馬です。これまで何度か取りあげられ、龍馬ファンも多いと思います。私も決して龍馬が嫌いではありませんし、司馬作品は、私も好きな歴史小説の一つです。しかし、この時代を龍馬や、新撰組だけに代表させ、論じるのはいささか食傷気味で、あまり良い気がしません。確かに時代の変化の時期です。様々なヒーローが登場し、消えていく時代です。そのこと自体は否定しませんが、背後にある政治・経済・外交を丁寧にとらえることなしに、登場人物だけの評価で歴史が進むということはありません。このあたりを忘れて変な（妙な）シンパシーだけで「熱く語る」のは、間違いだと思います。龍馬・勝海舟・木戸孝允・西郷隆盛・大久保利通たちだけで歴史が動くことはありません。無論、新撰組だけで、幕府の崩壊が止められるわけでもないのです。「英雄（＝ヒーロー）史観」は禁物です。その点で逆に島崎藤村の長い歴史小説『夜明け前』を読む方が歴史を深部からとらえることができると思います。これは受け売りですが、明治維新を扱う研究者や歴史教育に携わっている（携わった）方々の評価でもあります。頂点の士族（下級武士）ではなく、豪農、民衆、地方から明治維新をとらえることの必要性を感じます。高校生・予備校生の人たちはとても歴史小説を読む時間的なゆとりなどないでしょうが、もしできれば『夜明け前』を読んでください。『龍馬がいく』の明るさとは全く異なる歴史の「暗部」のようなものが見えるはずで、両者とも文庫版で購入読了できます。教える側の教師にとっては、『夜明け前』は必読文献だと思います。

1. 開国直前の状況

列国の接近と通商拒否は、そう長く続くわけではなかった。アヘン戦争後、1844年、フランスは琉球に来航し、ここを通じて薩摩藩と貿易を開始するようになった。さらに、同年、オランダ国王ウィルヘルム2世は、特使コープスを派遣し、将軍家慶に開国を迫ったが、拒否された。一方、アメリカ国内では、メキシコ戦争の勝利と金鉱発見により、ゴールドラッシュが起こり、太平洋沿岸の開拓が進み、対中国貿易のコース（サンフランシスコ～上海）を計画し始めた。また、捕鯨船活動の便宜から、北太平洋横断の航路設定計画が要望されていた。そのためには、薪水・食料などの供給地として日本はぜひとも開国する必要がある。すでにアメリカは、1846年、東インド艦隊司令長官ビッドルを派遣したが、開国に成功しなかった。

（ここまでの記述や、説明をした時、私にとっていつも頭をよぎるのは、「鯨」のことです。最近のシーシェパードの活動に見られる日本の調査捕鯨批判について、その善悪を云々したいわけではありません。もちろん、日本の鯨に対する理解や外国との文化の違いを前提にすべきことですが、そもそも、日本の捕鯨（調査捕鯨）に対するある種一方的な批判はそれとして、この活動に参加している人たちは、自分の国の、捕鯨文化・海洋資源（マ

グロやその他)について、「反省」を伴って活動しているのかが、いつも気になるのです。例えば鯨を取り食べるという文化を持つ日本のことは許せない、と考えることは、それはそれとして1つの考えですから、議論の1つとして成り立つでしょう。では、あなたたち、現在日本の捕鯨(調査捕鯨)を批判して止まない国の人たちは、かつてどのような捕鯨を行っていたのか、いなかったのかをきちんととらえているのだろうか、と。例えば、アメリカの捕鯨は、鯨の油(鯨油)をとるためのものであり、油をとれば、肉やその他は捨ててしまっていたのだ、それは果たしてどうなのかという問題とそれに対する「反省」。一方、日本では、とった鯨は肉・骨・ひげまでそれこそ丸ごと利用し、その命を奪った以上、それを利用して文化があったのです。反対活動に加わっている人々に、このあたりの歴史に基づく「反省」の上に立った反対活動がなされているのか。そこが私には——無論私なりの調査不足を認めた上で——理解できないところです。日本の捕鯨を批判すること自体を批判しているのではなく、あなたたちは、昔どのように捕鯨を行い、どのような利用をしたのか、そして、自らの先輩たちがやったことは、どう考えるのか、そうした「反省」をふまえ、やはり、日本の捕鯨はまずいと考へて、このような活動をしているのだ、というのなら、私にも理解ができるのですが、そうではなく、一方的に、日本がやっていることは許されないとばかりの行動は、感情的な対立ばかりが先行して、実りある論議につながらないと思えてなりません。私は、鯨や黒マグロを食べることが良いことだとも決して思っているわけではないのです。世界的な合意の結果、それらはもう食べることをやめようというのなら、それで良いと思っています。逆の「日本文化」の押し付けにも反対する立場です。それでも、現在の捕鯨反対活動を行っている人たちの「反省」に基づく活動の姿は、私には感じとれません。そのことを言いたいのです。あるいは、発展途上国で現在もなお問題になっているモノカルチャー経済の原因は、どうなのか、ということも当然射程に入れ「反省」に基づいた活動がなされるべきでしょう。あれほどいびつな経済状況になっている理由は、あなたたちが植民地経済を固定したからではなかったのか。当然、このことは、日本にも、日本の責任があることは言うまでもありません。現在の日本のことと言うなら、『バナナと日本人』、『エビと日本人Ⅰ・Ⅱ』(いずれも岩波新書、これらは日本史を学ぶことと合わせて、ぜひ読んでいただきたい本です)の「反省」が必要だと考へています。歴史に裏付けられない活動は、自らを真の改革者にしないのではないかとこんなことをいつも、この捕鯨を少しばかり教える時に感じます。)

2. ペリー来航・開国

その後、1853年、東インド艦隊司令官ペリーが、4隻の軍艦を率いて琉球を経て、浦賀に来航した。「太平のねむりを覚ます蒸気船たった四はいで夜もねむれず」という狂歌は、よく知られているが、2隻が半蒸気・半帆船の外輪式の軍艦(旗艦サスケハナ号・ミシシッピー号)で、(外輪式は、船の外側に水車のようなものがついているというイメージです。

琵琶湖に就航しているミシガンという船を思い出してください) あとの2隻(プリマス号・サラトガ号)は帆船であった。ペリーは、浦賀に入港後、浦賀奉行に大統領フィルモアの国書を手渡し、開国を要求した。

◆ペリー派遣の最大のねらい

「日本諸島沿岸において座礁・破損もしくは台風のためやむなく避泊する合衆国船舶乗員の生命。財産の保護に関し、日本国政府と永久的な取り決めをおこなうこと」(大統領フィルモアの国書の冒頭)であった。

幕府は、老中阿部正弘を中心に協議を進めると共に、江戸在住の諸侯に意見を求め、あわせて朝廷にこのことを報告した。その結果、これ以後朝廷の地位が次第に上昇していくことになる。阿部は国書について翌年に回答することを約束した。しかし、阿部に具体的な案があったわけではなく、いわゆる「ぶらかし策」というその場しのぎ案でアメリカとの交渉をごまかそうとしたにすぎない。ただ、1853年に従来の大船建造の禁止が解かれたことをあげることができるだけである。

その前後に、ペリーは、軍事基地・寄港地として琉球・小笠原を押さえ、そこに貯炭所を設けた。だから、この時点ですでに開国はなされていたと考えても良いだろう。翌1854年、ペリーは神奈川沖に再来航した。そして日本側全権林大学頭とアメリカ側全権ペリーとの間で日米和親条約12カ条が結ばれた。この条約では①下田・箱館の開港、②薪水・食料の供給、③領事駐在、④片務的最恵国待遇などが取り決められた。これと並行して、1853年7月、ロシアのプチャーチンが長崎に来航し、開国を要求した。そこで、ロシアとも、1854年、日露和親条約が結ばれ、択捉島とウルップ島間に国境を設け、樺太を両国共有とした。さらに、下田・箱館以外に長崎の開港が決められたため、アメリカにも最恵国待遇の措置により開港が認められた。

3. 安政の改革

この間幕政を担当した老中阿部正弘は、国内では「挙国一致策」を実行した。まず、江川英龍・川路聖謨としあきらら有能幕臣を登用すると共に、前水戸藩主徳川斉昭を幕政参与とし、水戸・薩摩・土佐・越前の藩主らの協力を取り付け、同時に江戸湾に砲台を築き、講武所・蕃書調所を江戸に、長崎には海軍伝習所を設けて、軍制強化をはかった。

4. 安政の5カ国条約

日米和親条約に基づき、1856年、ハリスが駐日総領事として来日し、下田に近い玉泉寺を初の領事館とした。翌57年、江戸に出府したハリスは、老中堀田正睦と会見し、自由貿易を強く要求した。このため、幕府は、1857年年末から58年年始にかけての1カ月をかけただけで、日米修好通商条約14カ条と貿易章程7則を締結するに至った。ハリスは、同

じ頃清国がイギリス・フランスと戦い敗れる**アロー号事件**を利用して**天津条約**を結んだことを幕府に報告し、日本が同様の条約をこれらの国々から要求されないようにするためには、アメリカとの条約締結しかないと脅迫し、幕府はこれに応じ、条約締結を行うこととなった。アメリカとの同様の条約は、他にイギリス・フランス・ロシア・オランダとも結ばれることとなった。特にアメリカとの条約は、①神奈川・箱館・新潟・兵庫・長崎の5港とする。②領事裁判権の容認。③片務的は協定関税制を認める。というものであった。この条約の本質はまさに不平等条約であることが明らかであった。同条約批准は、1860年新見正興一行が、ポーハタン号で渡米したことでなされた。なお、その際幕府は、ポーハタン号に同行させるために咸臨丸を随行させた。この船の提督は木村喜毅、艦長は勝海舟であった。また、通訳には1851年に帰国したジョン万次郎が採用されている。

◆日米修好通商条約と天津条約との違い

中国（清）が結んだ天津条約より、日本が結んだ条約の方がずっとマシな条約だった。何故なら、天津条約は、アロー号事件の敗北を喫して結ばれた「敗戦条約」であったのに対し、日米間の条約は、交渉条約であったことによる。

5. 明治維新論

ところで、学界の本格的な論争に立ち入って述べることはしませんが、この当時同じアジアにありながらも、何故、日本だけが清やインドのように植民地にならなかったのか、ということを考えておきたい。実際に、日本は欧米先進国の植民地になる危険性もあったが、かろうじて、あるいは幸いにも植民地にならずにすんだのである。その理由は、各研究者により見解が相違しており、結論づけることはできないが、そのことを承知の上であえて整理すると、①欧米諸国が中国の太平天国の乱やインドのセポイの乱の経験から、武力外交がかえって反乱を激化させ、本来の目的＝貿易・市場の開放などを達成できないと考えたこと。②欧米列強の関心が、当面日本よりも中国にあったこと。③欧米列強間の戦争、つまり、ロシア・クリミア戦争（1853年）、クリミア戦争（1854年）、南北戦争（1861～65年）などが続き、アジアよりも国内問題の解決が優先されたことによると考えられる。

6. 開港後の貿易

1859年、幕府は貿易を開始した。また、同年横浜を開港した。この貿易の特徴は、①貿易の中心港は横浜で、全体の80%を占めている。貿易相手国はイギリスが中心である。アメリカは、南北戦争が災いして後退した。②貿易の仕方は、居留地＝条約締結国が外国人に一定地域を限って居住・貿易を許可する地域で行われた。日本側の商人を売込商といい、生糸を大量に扱った茂木惣兵衛が知られている。③貿易額は、1860～67年までは出超であった。④輸出品では、生糸・茶が合計で90%を占めた。輸入品の約80%は綿糸・綿製品・

毛織物である。特に綿糸生産は日本でも盛んであったが、安いイギリス製品が輸入されたため、一時期壊滅的な打撃を被った。生糸の大量輸出は、原料不足をおこし、西陣などの特産地が危機に陥った。⑤こうした状況を打開するために、幕府は**五品江戸廻送令**を1860年に出した。しかし、幕府が期待した物価引下げも大した効果があがらなかった。⑥さらに、開国と同時に金貨が大量に流出した。日本では金1：銀5の交換比率であったが、国際的には金1：銀15であったことによる。つまり、外国人が金1kgを銀15kgにかえて日本に持ち込み、それを金と交換すると、日本では金3kgを渡さねばならなかった。こうして流出した金は50万両といわれている。

◆貿易の影響は、あと一つ流通機構の変化もあげるべきであろう。すなわち、在郷商人の台頭と生糸における横浜～八王子間のルート開設に見られるような生産地と開港場を結ぶ新しい流通ルートが形成されていった。

7. 幕府の分裂

修好通商条約調印をめぐり、幕府内部は分裂しはじめる。まず、条約調印をめぐり意見を求められた徳川斉昭・越前藩主松平慶永らは、朝廷の勅許を受けるべきだと述べた。これを受けて朝廷に赴いた老中堀田正睦に対し、**孝明天皇**は、勅許を拒否した。さらに、13代将軍家定の後継者問題が発生した。家定は病弱で無能であり、後継の嫡子がいなかった。そこで、徳川斉昭・松平慶永らは、年齢と聡明さから、斉昭の子一橋慶喜を推した。このグループを一橋派という。一方、井伊直弼ら有力譜代大名は、血脈と正統性を理由に、紀伊藩主の子徳川慶福を推した。これを南紀派という。こうした状況の中で、幕府は**井伊直弼**を**大老**とし、井伊による独裁政治が開始された。先にみたように、中国をめぐる列強の圧迫に動揺した井伊は、修好通商条約調印を強行した。さらに、1858～59年にかけて、一橋派を中心に敵対勢力を弾圧した。**安政の大獄**である。徳川斉昭・松平慶永は蟄居。謹慎に処せられ、橋本左内・頼三樹三郎・吉田松陰は身分をわきまえずに政治批判を行ったという理由で処刑され、梅田雲浜は獄死した。こうした井伊の弾圧に対し、水戸藩を中心とする浪人たちは、1860年、桜田門外で井伊を襲撃暗殺した（**桜田門外の変**）。この事件について、日本近代史研究をリードした井上清は、「浪士とよばれる人々が、大名（つまり藩という枠）を乗り越えて政局の前面に出た最初の劇的な事件」だったと評価している。

8. 幕府の公武合体策

井伊の後を受けて老中となった**安藤信正**と久世広周は、朝廷と幕府さらに雄藩との融合による公武合体策を実行した。その最初の試みが14代将軍家茂の妻に孝明天皇の妹**和宮**を迎えるというものであった。天皇は最初これに反対したが、攘夷実現のためという説明を受け、受け入れた。和宮はこの時すでに有栖川宮熾仁親王と婚約していたが、これを破棄

して家茂と結婚したのであった。当然のことながら、政略結婚であり、反発が生じた。老中安藤信正は、婚礼の直前、江戸坂下門で襲撃された（坂下門外の変）。

9. 薩摩藩の公武合体策

幕府主導の公武合体策が失敗に終わった後、今度は薩摩藩主後見役の島津久光が公武合体策を進めていく。久光は、勅使大原重徳と共に江戸に出向き、幕政改革を要望した。江戸への旅の途中、京都伏見の寺田屋に集合していた薩摩藩士有馬新七や久留米の神官真木和泉を捕らえる寺田屋事件が起きている。江戸に着いた久光は、直ちに幕政改革を要求し、実行させた。これが文久の改革である。その内容は、①一橋慶喜を将軍後見職に、松平慶永を政事総裁役に、松平容保を京都守護職にすること。②参勤交代を緩和すること。従来のやり方を改め、3年に1回とする。但し、大々名は江戸在府1年、他は在府100日、あわせて大名の妻子の帰藩許可がなされた。また、西洋式軍制を採用することとなり、歩騎砲3隊の編成が決まった。③さらに、兵賦令が制定され、幕臣から石高に応じて兵士または兵賦金を徴収し、銃隊を編成することとした。④1862年に蕃書調所を改め、洋書調所とした。⑤幕府から留学生を欧米に送ることもなされた。西周・津田真道・榎本武揚3人が1862年、オランダに送られた。

10. 尊王攘夷運動の激化

この運動の思想は、欧米人を「蛮夷」と嫌悪する反発から出発し、それと共に水戸学的な尊王論や復古神道による日本＝神国説とによって理論化したもので、尊王と攘夷が結合されたものである。攘夷運動は、開国後盛んとなり、ハリスの通訳でオランダ人のヒューステンの暗殺（1860年）、東禅寺事件（1861年）が起きている。これに加え、公武合体策のある程度の成功は、尊攘派を一層過激な行動に立ち上がらせた。1862年の生麦事件は、薩摩藩の実行であるから別としても、同年の江戸品川のイギリス公使館襲撃事件など攘夷運動が激化していった。

◆文久期の尊攘派が絶大な権威性を持った政治的カリスマとしての天皇を歴史の舞台に登場させた理由は、現実的力関係では圧倒的に劣弱な自分たちの立場（士族＝下級武士）を天皇の権威を強調することで代償し、状況突破の梃子にしようとしていたからである。だが、こうして出現したのは、現実の天皇とは全く異なる志士たちの幻想としての天皇だった。何故なら天皇は、基本的には公武合体を良しとし、身分の低い志士たちをうまく利用しようとしていたのであるから。このことは、文久3年8月18日の政変への対応でも理解できる。

尊攘派の中心的存在であった長州藩は、久坂玄瑞をリーダーとし、活動を活発化させていた。土佐藩でも武市瑞山らが台頭していた。長州藩の尊攘派は、公家の三条実美を通じ

て孝明天皇を動かし、幕府に攘夷決行を要請させた。その結果、幕府は1863年5月10日を期して攘夷決行を実施する布告を出した。布告を受けた長州藩では、同日下関海峡を通過する外国船に砲撃を行った。こうした尊攘派の動きに対し、京都守護職の松平容保は、薩摩藩と協力し、同年8月18日、京都を制圧し、長州藩士と三条実美ら尊攘派公家7人を追放した（**文久3年8月18日の政変**）。尊攘派による天皇の大和行幸は、この政変によって中止された、これと前後して尊攘派による絶望的な挙兵が実行される。京都の池田屋で新撰組によって襲撃された池田屋事件をはじめ、土佐の吉村寅太郎の天誅組の乱、筑前の平野国臣らの生野の変などがそれであった。また、真木和泉・久坂玄瑞らに率いられた一行は、京都の蛤御門で会津。薩摩両藩と戦い敗北した（**禁門の変**）。

11. 薩長改革派の台頭

すでに1863年の時点で、西南雄藩は欧米との武力衝突を経験していた。その一つが、生麦事件の解決を要求するイギリス艦隊の砲撃を受けた**薩英戦争**であり、ついで長州藩の**外国船砲撃事件**である。後者については、1864年、イギリス・アメリカ・フランス・オランダの四国連合艦隊が来襲し、陸戦隊の上陸を許した**四国艦隊下関砲撃事件**（下関戦争）である。この戦いで長州藩が敗北した結果、幕府は長州藩征討を全国の大名によびかけ、征討に成功した（**第一次長州征討**）。この戦いの時期に、高杉晋作・桂小五郎らは、あくまでも幕府と戦うことを主張し、民兵隊＝**奇兵隊**を組織した。征討によって長州藩内に一時的に強まった保守的・日和見的指導部に対し、彼らはこの奇兵隊をはじめとする民兵隊を動かして内乱を実行し、延べ2カ月に亘る戦いの結果、1865年、桂・高杉を中心にロンドンに密留学してきた井上聞多・伊藤俊輔を加えた新たな藩政指導部を形成した。

同様のことは、薩摩藩でも薩英戦争後に起こった。西郷隆盛・大久保利通らは、イギリスと結びつき藩内の改革を実施し、新たな指導部を形成した。こうしたグループは、従来の尊攘派ではなく、開国討幕派というべきグループであった。

12. 薩長連合

1866年、土佐の坂本龍馬・中岡慎太郎の仲介によって**薩長連合**が成立した。この組織は、予定されている第二次長州征討にあたり結ばれたものであった。薩長連合は、京都の薩摩藩藩邸で坂本龍馬立会いのもと、木戸孝允・薩摩藩家老小松帯刀・西郷隆盛とで結ばれた。薩長2藩は、さらに鉄砲の売込商グラバーを通じて結びつくことになった。グラバーの背後には、イギリス公使パークスがいた。

同年7月～9月にかけて、幕府は第二次長州征討を実施した。しかし、薩長連合が結ばれていたことで、薩摩藩は出兵せず、戦意を失った幕府軍は、将軍家茂の病死を理由に撤兵した。一方、朝廷では孝明天皇が急死し、1867年、14歳の睦仁親王が即位した。**明治天皇**

である。

13. 慶応の改革

家茂に代わり 15 代将軍に就任した**徳川慶喜**は、フランス公使レオン＝ロッシュの指導と援助によって慶応の改革を実行した。それは、①幕府の機構改革を進め、5局＝国内事務・外国事務・海軍・陸軍・会計を設け、それぞれに専任老中を置いた。②フランスの援助のもとで軍制改革を実行した。③フランスの技術援助を受け、横須賀製鉄所を建設し、あわせて艦船を購入した。こうした幕府側の動きに対し、薩摩藩は雄藩連合による統一政権を構想したが、1867年5月の四侯会議＝兵庫開港などに関する松平慶永、山内豊信・伊達宗城、島津久光らの会議の失敗から武力による討幕を決定した。

14. 討幕の密勅

しかし、討幕の機運は民衆の世直し一揆。ええじゃないかの広がりと共に高まっていった。朝廷はついに薩長2藩に対し、1867年10月14日、**討幕の密勅**を下した。しかし、同日、かねてから公武合体の巨頭、前土佐藩主山内豊信とその家臣後藤象二郎が勧めていた政権奉還の建白＝**大政奉還**が上表された。この文書は、坂本龍馬の「船中八策」の影響を受けたもので、天皇のもとで各藩の代表者が議会を構成するといった公議政体論的な政権構想であった。大政奉還の上表が出されたため、討幕の密勅は一旦取り消されることとなった。討幕派の方では、再度計画を練り直し、同年12月9日、**王政復古の头号令**を出すことに成功した。ここでは、①摂政・関白の廃止、②総裁・議定・参与の新設が決められ、総裁には有栖川宮熾仁親王が任命され、議定には、皇族・公家が、参与には討幕派の藩士（西郷・大久保・広沢真臣・木戸・後藤・福岡孝弟）と公家が任命された。さらに、同日深夜、新任の三職は小御所会議を開き、徳川慶喜の辞官（内大臣職の辞任）と領地没収を命じた。

15. 戊辰戦争

こうした動きに対し、旧幕府側は、新政府に対して反乱を開始した。**戊辰戦争**である。この戦いは大別して4つの戦いが結びついている。まず、①**鳥羽・伏見の戦い**。大坂城にいた徳川慶喜は、旗本・会津、桑名3万人の兵を率いて入京をはかり、鳥羽・伏見で新政府軍を戦ったが敗北し、慶喜は、軍艦開揚で江戸に戻った。②**東征戦争**。新政府軍は、東海・東山・北陸3道に分かれ、江戸に向けて進軍した、慶喜はすでに戦意を喪失しており、勝海舟・西郷隆盛の会談で江戸城は無血開城された。旧幕府軍の一部、彰義隊が上野に立て籠もったが、一日で新政府軍によって鎮圧された。③**奥羽越列藩同盟**の抵抗。会津藩を

中心とする東北・北陸の 31 の諸藩は同盟を組織し、新政府軍と戦った。新政府軍は会津平定を行い、東北征討を終了させた。④**五稜郭の戦い**。旧幕府海軍のリーダーであった榎本武揚は、函館五稜郭を拠点に戦ったが、黒田清隆の指揮する新政府軍に敗北した。この五稜郭の戦いを最後に新政府軍と旧幕府軍との戦闘は終了した。

また、この一連の戦いの間、各地で政治の一新を求める草莽隊が誕生し、新政府軍に協力した。その中で相楽総三が率いた赤報隊が良く知られているが、後に相楽は偽官軍を組織したという理由で処刑された。